

失敗園

太宰治

青空文庫

（わが陋^{ろう}屋^{おく}には、六坪ほどの庭があるのだ。愚妻は、ここに、秩序も無く何やらかやら一ぱい植えたが、一見するに、すべて失敗の様子である。それら恥^はずかしき身^みなりの植物^{さく}たちが小^さ声^こで囁^{ささ}き、私はそれを速記する。その声^{こゑ}が、事実、聞えるのである。必ずしも、仏人ルナル氏の真^ま似^ねでも無いのだ。では。）

とうもろこしと、トマト。

「こんなに、丈^{だけ}ばかり大きくなつて、私は、どんなに恥^はずかしい事か。そろそろ、実^みをつけなければならぬのだけれども、おな

かに力が無いから、いきむ事が出来ないの。みんなは、葦だと思
うでしょう。やぶれかぶれだわ。トマトさん、ちよつと寄りかか
らせてね。」

「なんだ、なんだ、竹じゃないか。」

「本気でおっしゃるの？」

「気にしちゃいけねえ。お前さんは、夏痩せなんだよ。粋なもの
だ。ここの主人の話に拠ればお前さんは芭蕉にも似ているそう
だ。お氣に入りらしいぜ。」

「葉ばかり伸びるものだから、私を揶揄なさっているのよ。ここ
の主人は、いい加減よ。私、ここの奥さんに氣の毒なの。それや
真剣に私の世話をして下さるのだけれども、私は背丈ばかり伸び

て、一向にふとらないのだもの。トマトさんだけは、どうやら、実を結んだようね。」

「ふん、どうやら、ね。もつとも俺は、下品な育ちだから、放ほつて置かれても、実を結ぶのさ。軽蔑し給うな。それでも奥さんのお氣に入りなんだからね。この実は、俺の力ちからこぶ瘤こぶさ。見給え、うんと力むと、ほら、むくむく実がふくらむ。もう少し力むと、この実が、あからんで来るのだよ。ああ、すこし髪が乱れた。散髪したいな。」

クルミの苗。

「僕は、孤独なんだ。大器晩成の自信があるんだ。早く毛虫に這いのぼられる程の身分になりたい。どれ、きょうも高邁こうまいの瞑めい想そうにふけるか。僕がどんなに高貴な生まれであるか、誰も知らない。」

ネムの苗。

「クルミのチビは、何を言っているのかしら。不平家なんだわ、きつと。不良少年かも知れない。いまに私が花咲けば、さだめし、いやらしい事を言つて来るに相違ない。用心しましょう。あれ、私のお尻をくすぐっているのは誰？ 隣りのチビだわ。本当に、

本当に、チビの癖^{くせ}に、根だけは一人前に張っているのね。高邁な瞑想だなんて、とんでもない奴さ。知らん振りしてやりましょう。どれ、こう葉を畳んで、眠った振りをしていましょう、いまは、たった二枚しか葉が無いけれども、五年経^たったら美しい花が咲く
のよ。」

にんじん。

「どうにも、こうにも、話にならねえ。ゴミじゃ無え。こう見えたって、にんじんの芽だ。一箇月前から、一分も伸びねえ。このまんまであった。永遠に、わしゃ、こうだろう。みつともなくて

いけねえ。誰か、わしを抜いてくれないか。やけくそだよ。あははは。馬鹿笑いが出ちやつた。」

だいこん。

「地盤がいけないのですね。石ころだらけで、私はこの白い脚を伸ばす事が出来ませぬ。なんだか、毛むくじやらの脚になりました。ごぼうの振りをしていましょう。私は、素直に、あきらめているの。」

棉の苗。

「私は、今は、こんなに小さくても、やがて一枚の座蒲団ざぶとんになるんですって。本当かしら。なんだか自嘲したくて仕様が無いの。軽蔑しないでね。」

へちま。

「ええと、こう行つて、こうからむのか。なんて不細工な棚なんだ。からみ附くのに大骨折りさ。でも、この棚を作る時に、この主人と細君とは夫婦喧嘩をしたんだからね。細君にせがまれたらしく、ばかな主人は、もつともらしい顔をして、この棚を作つ

たのだが、いや、どうにも不器用なので、細君が笑いだしたら、主人の汗だくで怒つて曰くさ、^{いわ}それではお前がやりなさい、へちまの棚なんて贅沢品だ、^{ぜいたくひん}生活の様式を拡大するのは、僕はいやなんだ、僕たちは、そんな身分じゃない、と妙に興覚めな事を言い出したので、細君も態度も改め、それは承知して居ります、でも、へちまの棚くらいは在つてもいいと思います、こんな貧乏な家にも、へちまの棚が出来るのだというのは、なんだか奇蹟みたいで、素晴らしい事だと思います、私の家にも、へちまの棚が出来るなんて嘘みたいで、私は嬉しくてなりません、と哀れな事を主張したので、主人は、また渋々^{しぶしぶ}この棚の製作を継続しやがった。どうも、ここの主人は、少し細君に甘いようだて。どれ、

どれ、親切を無にするのも心苦しい、ええと、こう行つて、こうからみ附けつていうわけか、ああ、実に不細工な棚である。からみ附かせないように出来ている。意味ないよ。僕は、不仕合わせなへちまかも知れぬ。」

薔薇^{ばら}と、ねぎ。

「ここの庭では、やはり私が女王だわ。いまはこんなに、からだ
が汚れて、葉の艶^{つや}も無くなっちゃったけれど、それでも先日までは、次々と続けて十輪以上も花が咲いたものだわ。ご近所の叔母
さんたちが、おお綺麗と言つてほめると、ここの主人が必ずぬつ

と部屋から出て来て、叔母さんたちに、だらし無くぺこぺこお辞儀するので、私は、とても恥ずかしかったわ。あたまが悪いんじゃないかしら。主人は、とても私を大事にしてくれるのだけれど、いつも間違った手入ればかりするのよ。私が喉が乾いて萎れかけた時には、ただ、うろうろして、奥さんをひどく叱るばかりで何も出来ないの。あげくの果には、私の大事な新芽を、気が狂ったみたいに、ちよんちよん摘み切ってしまったて、うむ、これでどうやら、なんて真顔で言つて澄ましているのよ。私は、苦笑したわ。あたまが悪いのだから、仕方がないのね。あの時、新芽をあんなに切られなかったら、私は、たしかに二十は咲けたのだわ。もう、駄目。あんまり命かぎり咲いたものだから、早く老い込んじやつ

た。私は、早く死にたい。おや、あなたは誰？」

「我輩を、せめて、竜の鬚ひげとでも、呼んでくれ給え。」

「ねぎ、じゃないの。」

「見破られたか。面目ない。」

「何を言ってるの。ずいぶん細いねぎねえ。」

「ええ面目ない。地の利を得ないのじゃ。世が世なら、いや、敗軍の将、愚痴ぐちは申さぬ。我輩はこう寝るぞ。」

花の咲かぬ矢車草。

「是生滅法。盛者必衰。いつそ、化けて出ようか知ら。」

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：渥美浩子

2000年4月27日公開

2005年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

失敗園

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>